

ふるさと交友録

～伊藤 公平～ 17

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんの“大切なひとびと”を紹介していきます。



明治30年代の帯広周辺。「十勝詳図」

伊藤公平(いとうこうへい)北見市在住、郷土史研究者。私設図書館「麦の風文庫」と「野草苑が あでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩る記」を連載。道新「ときわぎ」執筆者の一人。

明治三二(二八九九)年六月、永山村での最後の種蒔きを終えると、宇太郎さんは同じく移転を迫られている同村の五人と十勝に土地を求めて出発した。旭川からの鉄道はまだ美瑛までしか開通しておらず、そこで建設事務所の人にその先の情報を教えてもらい、帯広まで五〇里・凡そ二〇〇kmを鉄道建設予定線の杭を目当てに歩いた。八泊を野宿した。

当時の十勝地方は明治三〇年に河西支庁(のちの十勝支庁)が置かれるまでは根室支庁管下で釧路外十二郡役所に管轄されていた。依田勉三らの晩成社など先駆的な人達の入植はいくつかあったものの、開拓は全く進んでいなかったが、その二年前、北海道集治監十勝分監が置かれて、囚人三〇〇余人、看守その他職員二〇〇余人が帯広に居住することになって急速に都市化がはじまっていた。三之助さんの『落穂』(改訂版)には、当時の帯広は戸数二百数十戸という小さな村で、周囲には森林原野が延々と広がっていたとある。

宇太郎さんは、何日もかけて周辺の土地を見て回った。同行の人たちとも何度も話し合った。今、鉄道線はこの帯広に向って延伸しようとしている。土地も天塩にくらべて広大である。「将来…交通機関が整備されると間違いなく物資の一大集散市場になると確信…」(『落穂』改訂版、両親にもここならば自信をもって説明し納得させられると思った)。

宇太郎さんは明治十二年生まれだから、まだ二歳にすぎないが、十六歳で家郷を出奔して以来のことと合わせて考えると、自立の心盛んなばかりではなく、父・竹次郎さんの血をひいて商機を見る目もずばぬけていたと云っていいのだろう。

帰路は広尾まで南下して、そこで船便を得、一度函館まで行って折り返して室蘭で下船して、鉄道で旭川へ戻った。

永山村での最後の収穫は「前年の大洪水のおかげで土地は肥沃になり、…秋には平年以上の収穫があった」(前出)。あわただしい二年だった。